

河川を考慮したまちづくり先進事例<北九州市：紫川>

畑 和宏

1. はじめに

都市空間の観点から河川は水面を有する貴重なオープンスペースである。と考えたとき、河川整備は治水機能の向上を図るだけでなく、歴史、文化を含めた周辺の市街地の整備と活性化を図る総合的整備の視点が重要となる。北九州市（小倉）の「紫川マイタウン・マイリバー整備事業」（以下 紫川 MM 事業）では、河川を考慮したまちづくりとして、「横断的な組織の編成」「総合化された計画」及び「市民との協働」の3つを柱とし、170haにも及ぶ河川を含む既成市街地において、民間活力を生かした大規模な都市再生を実現しつつある。

本稿では、第4分科会の現地視察結果とともに河川を考慮したまちづくりの取組みにおける視点について述べる。

2. 紫川 MM 事業での取組み

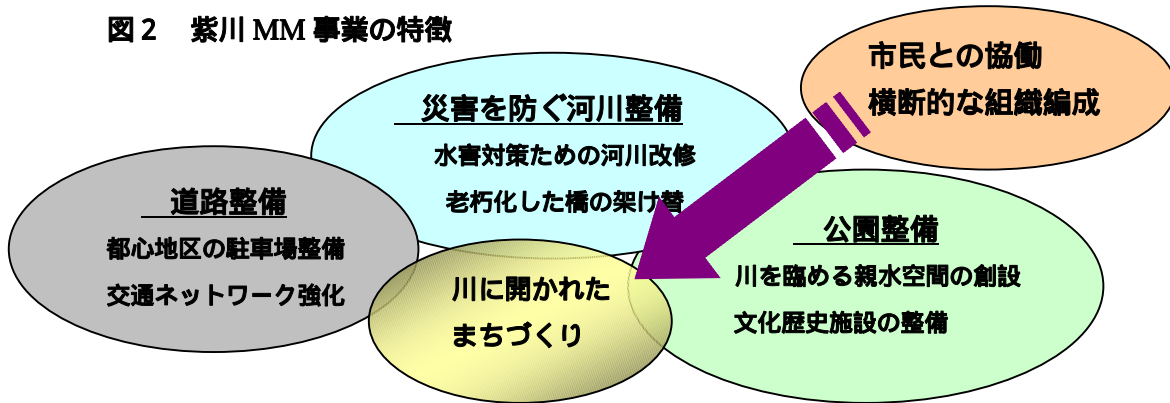
マイタウン・マイリバー整備事業は昭和 63 年に建設省（現 国土交通省）が創設した地域支援整備施策の一つである。河川沿いの市街地整備に関する事業（再開発、区画整理等の面的整備、及び道路、公園等の整備）と一体となって水辺環境の向上に配慮した河川改修を行うものである。

図1 事業マップと航空写真（市街地）



紫川 MM 事業の特徴は、河川整備、道路整備、公園整備を含め「総合化された計画」に基づく川に開かれたまちづくり、「横断的な組織の編成」及び「市民との協働」への積極的な取組みにある。また、事業マップに示したように、紫川を中心に、両サイドに種々の都市機能が分散し、川を渡る、川に近づく、川岸を歩くことの必然性を創り出すことにより、10橋を含む河川軸の整備がますます重要なものとなっている。

図2 紫川 MM 事業の特徴



3. 災害を防ぐ河川整備

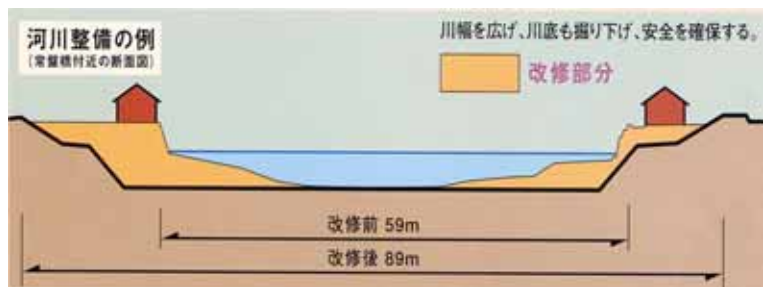
3.1 河川概要と被災履歴

紫川は市内の福智山を源にした延長 22.4km・流域面積 113.0 平方 km の二級河川である。河口の周辺は小倉の市街地にあたり、北九州市のシンボル河川として位置付けられている。一方、紫川は、海へ流れ出す河口部分が狭くなっている特徴的な河川でもあり、雨天時の水量が急激に増加し、水害に繋がる危険性の大きい河川として警戒されてきた。

3.2 河川改修事業

紫川の河川整備事業の基本的な考え方は、氾濫による水害から市民を守るため、幅を広げ、川底を掘り下げることである。また老朽化した橋の改修を行うことであった。

図3：河川整備の事例



3.3 紫川10橋

紫川 MM 事業の河川整備を特徴づけるものとして紫川に架かる 10 の橋がある。写真に示すように、土木設計技術者の視点で観察すると橋のデザイン及び構造の特殊性、多様性には驚かされる。

さらに着目すべき点は、一人の設計者が、紫川 10 橋の全体コンセプトに携わったことにあるのではないかと考える。「川に開かれたまちづくり」の中で、一度に 10 本の橋梁をデザインする立場になった場合、いったい設計者は何を考えるべきなのであろうか。

設計に携わった、上田篤氏は「橋は水平の展望台」といい、街の再生を願う人たちの多様な意見を踏まえ、水景都市としての街の顔となり、シンボルとして、つまり街の全体を見渡す空間としての位置づけを強調したと考えられる。その結果、創り出されたものが、現在の橋群である。これらの橋は、「海」「火」「木」「石」「太陽」「鉄」「風」といった自然の様態がそのままテーマとされ、周辺一帯の環境との調和を基本にしたデザインがなされている。



写真1：勝山橋（石の橋）



写真2：中の橋（太陽の橋）



写真3：紫川橋（鉄の橋）

表1 紫川に架かる代表的な橋

橋名	長さ：幅員	備考
紫川大橋（海の橋）	長さ：87m 幅員：35m	H5.4月完成 <バイパス整備事業>
室町大橋（火の橋）	長さ：77.3m 幅員：15m	H3.4月完成 <都計道路改良工事>
常盤橋（木の橋）	長さ：85m 幅員：6m	H7.3月完成 <治水対策事業>
勝山橋（石の橋）	長さ：88m 幅員：40m	H12.8月完成 <治水対策・公園整備>
中の橋（太陽の橋）	長さ：79.2m 幅員：36～43m	H4.5月完成 <車道拡幅>
紫川橋（鉄の橋）	長さ：83.5m 幅員：25m	H10.12月完成

4. 河川周辺の整備（公園・施設）

写真2：州浜ひろば

写真3：水環境館紫紅 S

4.1 州浜ひろば

江戸時代にあった州や干潟をイメージした広場である。潮の干満をうまく利用することで、浜は出現したり、なくなったりと様々な変化が見られる。水辺では親水性の高い水辺空間となっている。州浜の設計

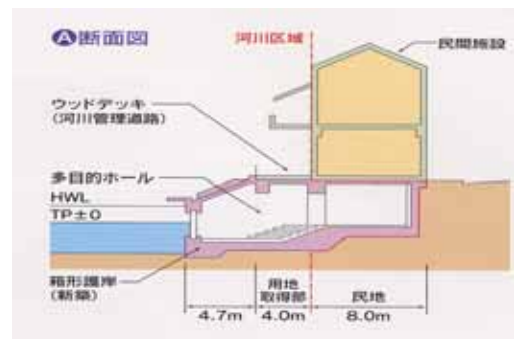


においては、水に親しめる人工空間にしておくか、潮の干満により波が打ち寄せるけれど次第に潟に変化する本当の自然の再現を選択するかが議論された。そして、先行して行われた埋蔵文化財調査で、江戸時代の石積みの護岸が現れたことにより、その旧護岸を一部に用いて後者の考え方を採用している。

図4 水環境館施設断面

4.2 水環境館

「川」と「水」をテーマにした体験型学習施設で、河川観察窓のような市民のアイデアも採用し、地上部には民間の飲食施設や展望デッキがある。



施設整備の発端は河川の拡幅であり、設計段階において地下部分を撤去して、護岸を新設するよりも、改修して箱型護岸を採用している。

4.3 滝

市民から寄せられたアイデアを実現し、岸から幅約50mの滝が河川に流れ込む。

4.4 駐車場の整備

幹線道路の整備に伴い市民からの要望が強かった駐車場を川の周辺に建設している。

4.5 馬借地区及び室町一丁目地区の市街地再開発事業

官民協力により、都市型ホテルや、物販・飲食施設や複数の映画館などの商業施設、新聞社・放送局・事務所などの業務施設、ホールやギャラリーなどの文化施設が入居した建物が建設されている。

5. 紫川に見る河川を考慮したまちづくりのヒント

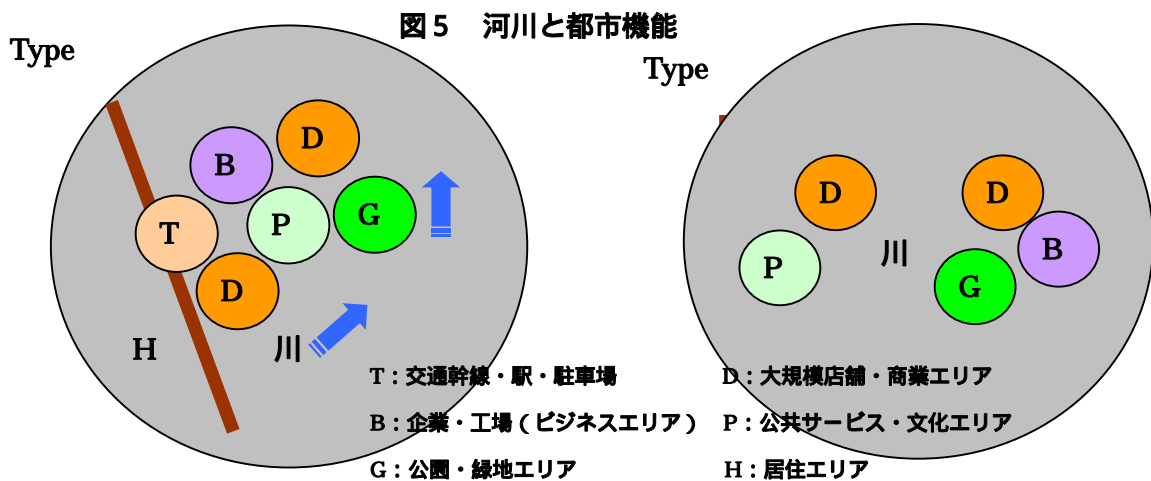
都市機能と河川との位置関係という視点で見ると、大きく2つに分類できる（図5参照）。Typeは都市機能が河川の位置とは関係なく、集中しているタイプである。一方、Typeは図示のとおり河川によって、主要な都市機能エリアが分散しているものである。

紫川 MM 事業前においても北九州は Type の構造であったように思える。しかし、事業前は紫川を挟んで、市庁舎、区役所などの公共サービスエリアだけ分散していた構造と考えられる。これでは都市の活性度、人や交通の往来や回遊性という観点からは、Type のように紫川から東の地区に都市機能が集中した状態であるといつてよい。

このような都市構造のまま、いくら河川拡幅や橋梁改修を推進しても、治水機能や交通機能の向上は図れるものの、川に開かれたまちづくりの次元まではほど遠いものであったように想像する。

市民が、川に向かう、そして渡る、川沿いを歩く、そして川に人が集まる目的と仕組みがなければ、川が街の顔になることはない。

視察を通じて、その仕組みが 10 橋の架け替えであり、都市機能の分散であり、親水施設の配置であることが見えてくる。そして、そこに市民が大きく関与していることは、これまで述べてきたとおりである。川をはさんで都市機能を分散させることにより、河川と橋の位置づけがさらに重要なものになる。橋を渡る意味、回数、回遊性が増す。橋や川岸には足を止めたくなるような空間が広がる。このように、それぞれの仕組みが融合することによって、紫川周辺では河川とともに都市再生が図られつつある。



6. おわりに

河川整備において、まちづくりをどの程度考慮するか。価値観が益々多様化する社会において、実に難しい課題でもある。この視察では、「川が変われば街が変わる」という信念がどの事業においても一貫されていたことが印象的であった。行政も、市民も川を変えれば必ず何かが開けるといふ状態からのスタートであったことが、事業推進の原動力になっていたと考える。

そこで、松江に目を移してみる。大橋川は、市民にとって、紫川とは違い、過去から現在において、近い関係にある河川といつてもよい。川を変えたいという強い意志ではなく、現在の河川との共存を模索している状態にある。また、生態系を含む河川環境の保全が大きなファクターとなる。大橋川を河川機能だけでなく、河川と都市機能全体において考えた場合、先に述べた Type に分類される。つまり、大橋川をはさんで、主要な都市機能が分散している構造にあり、紫川同様に河川軸としての意味は大きい。今後も治水、環境、景観、都市機能と周辺の建築物も含めた総合的な観点で大橋川の議論を進める必要があると考える。

最後に現地視察及び資料提供において、北九州市の山田正明氏には多大な協力をいただいた。ここに深く御礼申し上げます。 以上